

ベルフレンズ・センター

平成二十五年

四月一日
4/1
の観測

月曜日

観測者一覧

41

鈴木貴大 3

よ一 6

中里優希 9

田尻和花 11

中村凌 14

友定洸太 17

木下侑紀 20

4/1
観測者 鈴木貴大

目覚まし時計が壊れてしまったので、今はパソコンのアラームが起こしてくれる。

不忍通りの西端にいた。信号が変わるのを待っていた。朝、大学に行く途中。そこには女子大があって、目白通りを挟んで向かいには、生徒であろう女の人がたくさんいた。桜も咲いていて、そこでやっと、新学期なんだと実感が湧く。信号が青になる。女の人たちとすれ違くと、排気ガスと青い匂いに混じって、シャンプーの香りがした。めったに早起しないから、この香りがとても好きだ。

目白通りを横切り住宅地に入ると急な坂道になっていて、空がぐんと広くなる。新宿のNTTビルが見えた。そこを抜けると神田川にぶつかった。そこは桜の名所で、川沿いにはもう葉桜になってしまった木がたくさん立っている。なんとなく自転車の上で立って、右手を伸ばし葉に触れた、思ったより乾いていた。

大学は今日入学式だった。自分の時は入学式が震災の影響でなかった。羨ましいような気がしたが、ないものねだりだ。部室で一人、新入生を待っていたが短歌サークルの部室に来る新入生などいるはずもなく、ユーチューブで曲を流しながら、部室に置かれていた本を読んでいた。本は大して面白くなかったが、気分はすごくよかった。

もう担当の時間が終わろうとしていたときに、同じサークルで同級生の中村さんが来た。僕が、「やっぱり誰も来なかったよ」と伝えると、「まあ、来るわけないよね」と中村さんが言った。「なんで鈴木君は入ったの？」と聞かれたけど、なんでかわからなかった。昔、ある雑誌の編集長に「なんで大学に入ったんだ」と聞かれたときも、わかりませんと答えた。そしたらその編集長は「一回フランスの軍隊に入ったほう

がいい」と言った。その言葉は、未処理のままだ。今考えても、やっぱり処理できない。

帰り道、文京グリーンコートに寄る。初めて来た。人はあまりいなかった。近所の人ほとんどなんだろう。広く清潔だった。もっと早く来ればよかったと思う。「もっと早く」ばかりだ、最近は。

早起きしたせいか、夕方から寝てしまった。起きると夜の十一時だった。切らしていたシャンプーを買いに行き、ついでにツタヤにDVDを返す。途中で雨が降りだした。家を出る前に、ツイッターで「雨だ」と呟いている人がいた。その人は確か、東京湾の埋立地に住んでいた。そこで、こことの距離を想像するが、途中で想像していたことを忘れてしまった。

昼に、夜に飲もうとビールを買っておいたが、飲む気分にはならなかった。寝ようと思い、この文章を閉じようと思っていたんだけど、ビートルズの「ミッシェル」が流れてきた。

大崎善生の「ラバーソウル」という作品に、この歌が登場する。読み返そうと思ったがやめた。アルバム「ラバーソウル」での「ミッシェル」の次の曲、「ワット ゴーズ オン」のイントロがあまりに陽気で、興奮してしまっただけから。これはいつもそう。そういえばその次の曲「ガール」は中里さんが好きな歌だったな。正確に言えば、たまが歌う「ガール」が好きなのか。

寝よう。「ファイブ」とパソコンが急に音を出した、時報だ。

4/1
観測者 一

明日から大学院生になるらしい。

でもそんなことよりも、スピノザはレンズ磨きをして生計を立てていたことのほうが気になる。スピノザの哲学についてはほんの少ししか知らないが、どこかでその特殊な職業について読んで、急に気になってきた。

ニコンのエンジニアがレンズのコーティングを設計しながら、哲学書を書くところがうまくイメージできない。「それぞれの業種がぞっとするほど専門化してしまったから、そんなことできるわけねえじゃん」というのが、ジョーシキらしい。

なぜこんなことを考えているかという、という書き出しではじまる段落を書いて説明するのがジョーシキというか暗黙のルールになっているが、そんな面倒くさいことする気になれない。何かについて考えながら、なぜそのことについて考えているのかについて考えるのが、論文を書くならともかく、少なくとも一般的な習慣ではない。

便座の設計しながら、大学院で自分の専門でもできたらいいなあーと思っている。別に便座じゃなくてもいいけど、ずっと同じことやりつづけるのはうんざりするのだ。スピノザはレンズ磨きで生計をたてているということは、現代的な分類でいうとそれが本業で、哲学は趣味だったということになる。でも（イキった言い方でいうと）結果的に哲学のほうが彼の名声を歴史という舞台に轟かせたわけだ。

趣味が本業の付属物ではなく、実際はまったくその逆に、本業はあくまで妥協でしかなく、趣味の方が高尚（うまい形容詞が見つからんから察せ）だったりするのだ。あまり一般論的な響きを帯させたくないが、あえてそうやってしまいたい気持ちなのだ、今。

話がまったく変わってしまうが、最近どこに行ってもカメラを持ち歩

いている。レンズを通して世界を眺めたい欲望に身を焦がしている。「現実世界から目を背けたいからじゃねえのか？」と現実逃避説をすべてに当てはめようと奮闘している人たちに言われそうだが、実際のところ目玉自体が一つのレンズだ。だからできるだけたくさんのレンズを通して世界を眺めるのは、現実逃避説とかいうゴミ論理とまったく逆の心理から来ている。

明日から院生になる。本当は意気込みとか日記に書いておくべきなのだが、そんなこと書いてあとで読み返した場合、「この時は何もわかっていなかったな」ってなるのが目に見えているからあえて書かない。今の気持ちを頭に思い浮かべながら、レンズを自分の部屋に向けてシャッターを切る。本棚の片隅に返却日が迫っているスピノザについての研究書が写っている。まだ5ページぐらいしか読んでいない。

4/1

4/1
観測者 中里優希

朝の満員電車のかばんが腰とおしりと腕に当たり揺れている中で七人がけの座席の向こうのドアの近くが悲鳴をあげていた。さっき停車信号のため停車していた電車が動き出したせいで姿勢がくずれ靴の乱れた音が鳴ったからだと見ていると乾いた音が続いた。平手打ちの音がした後にまた悲鳴が起きた。「え」「なに」「やばくね」「え?」「え?!うわあっ」「えっヤダヤダヤダヤダ!!!!」車内にゲロがはかれたときと同じように人が人を避けて空間がつくられると人がぐにゃぐにゃに蹲っていた。血が出ていた。血が出ているところからソーセージに似ているピンクの小腸が出ていた。ソーセージがホカホカしていた。朝ごはんはんにソーセージを食べたんだらう。誰が誰を撃ったか分からないのでみんな泣いたり唇を噛んだりしながら高田馬場駅までの残り3分を過ごしている。駅について降りるとドアが閉められたので振り返った。満員電車は動き出して新大久保駅に向かった。みんな仕事にいかなければならない。きょうは4月1日だからだった。

4/1
観測者 田尻和花

今日も本を立てて置いた。パソコンデスクの上にはたくさんの本がそびえ立っていて今日も一冊デスク横の壁に立てかけた。黒ペンは並べて置いた。ペンは立てない。並べる。今日も二本台所に並べておいた。気持ちがいい。母は、私が立てた本のビルディングをすぐ横にしてまとめだす。その方が高い山になって危ないのに腹立つなあとは思っているけれど、最近は横にしないので嬉しい。ビルディングは横にしては成立しないのだ。それを母に言っても理解してもらえるところか叱られるので、いつもふざけた風に「えー、せっかく本のビル街作ったのにい」と言う。母に通じたことはない。兄のるろうに剣心が高い山になって居間に脅威を与えている。

帰省中の兄が持ってきた漫画を読んだ。聖☆おにいさんめちゃくちゃ面白い。私が思わず「えっへ」と笑っても家には誰もいなかった。「えっへ」が部屋に静かにこだましたが、自身の「えっへ」でまた「えっへ」と誘われ笑いしてしまった。「えっへの連鎖」だ。こういうのを気分が高揚している、というのだろう。このままバイトの面接に行ったら確実に履歴書の端の方に「人柄◎」と書かれると思う。受かりそうだ。別れた彼氏ともスムーズに借りていた本の受け渡しとジョジョアニメ版第二部について語れる気がする。別れた彼氏のことを考え始めたら急に減入ってきたのでもう考えるのをやめる。

最近は外側と内側のバランスが以前のようにとれてきている気がする。大学生になってからははりきって外界の人々と交流したり外界の出来事を体験したりしなければと躍起になっていたが、だいぶ空回りして心が摩耗したように思う。外界の人々の思考や熱にまみれ、なにをしても自分がどこにいて何をしているのか薄ぼんやり、まるで夢の中にいる

ようだった。でもここ数日、本当に久々に本や漫画を一日中読んで、やりたいところや行きたいところが心の底から湧き出てくるようになった。今まで少し外界での生活にこだわりすぎていたのかもしれない。私は元々本や漫画を読んで内側に補給し外界の人々と交流して発散していたのを今更ながら思い出した。人には人それぞれのバランスがあるんだなあって。皮膚の内側と外側の。そろそろあの人のために伸ばしていた長い前髪も切ろうと思う。

明日早く起きられますように。

4/1

4/1
観測者 中村凌

今日サイゼリヤにいった。ほうれん草のソテーとハンバーグとラージライスを頼んだ。八百円だった。他愛もない話をしてたばこを吸った。ビールを飲むこともできたがみんな疲れていたののでやめにした。窓の外を見るとさっきから降っていた雨がいつそう強まって日が沈んで夜がいつそう寒くなった。店内まで冷え込んでりんとした空気はいたるところにあるお馴染みの西洋絵画をはっきりと見せ子どもの頃の思い出を思い出させた。まだ子どもだった。ハンバーグとライスを頼んだ。ラージライスにするか迷ったが母は昼も夜も働いているのでやめにした。たった五十円しか変わらないけどどうしても頼めなかった頼むことはできなかった。夜は空腹のまま横たわった。目がさえて上を見ると二段ベッドの上で眠る弟の布団の背中が見えた。はしごを登る体力を使ってもっとお腹が空いていたかもしれないし、そうではないかもしれない。寝返りを打った。弟は四つ下だからまだ体も小さい。二つ下の妹は隣の部屋で眠っていた扉から光は漏れていなかった。音も聞こえなかった。妹の一人部屋を母に強く勧めたのは一年ほど前だ。妹にも中学受験が迫っていた。妹は勉強が好きだったのでその後も一人部屋を使うことになった。女の子は一人部屋がいいと思ってのこともあった。部屋は三つしかなかったが仕方なかった。妹には努力の才能があった。弟にはスポーツの才能があった。自分には中学受験の運はあったがひどくお金がかかった。もしなにか才能があったとすればそれはお金を使わせる才能だ。そのせいで父はいなくなったしもともと家庭をうまくやりくりすることができなかったあるいはその才能が父にはなかった。母は運がなかった。母には子どもを守る使命があると思っていた。実際、母が親権を持った。そのせいで日が昇る前に帰ってきた母は血塗れだった。自転車で転んだと言った。アルコールと香水のにおいがした。母の彼氏に連絡した。父

が借金を背負ったのと母が浮気したことについて前後関係は知らない
ぶん母の彼氏は頼れる人ではあったが、母はあまりにも疲れていた。家
に来てくれと言った。止血と消毒を済ませたところでもうすぐ着くとメ
ールがきた。安心して家を出た自転車に乗ってどこか遠いところに向か
った。もう何年も家には帰っていない。そうやって昨日もサイゼリヤに
きたのだった。ハンバーグとラージライス頼んだ。六百円だった。他
愛もない話をして自転車に乗った。ビールを飲むこともできたが飲酒運
転になるのでやめにした。自転車も酒気帯び運転の対象なのかという話
はした。自転車に乗ってたばこを吸うことも射程に入れた路上喫煙禁止
のマークが窓の外で明日まで降り続く雨に降られて夜はずっと寒く冷
えた。昨日と今日で違うのは彼女がいるかいないかだった。自転車に乗
るのに疲れると彼女の家泊まった。家出と彼女ができたことの前後関
係は覚えていない同じだったかもしれない。完全に重なった二つの出来
事だといいい運命みたいですごいい。それでもう自転車に乗って転ばな
ければいい。血塗れにならないで済むしなにより心配をかけない。あと
は僕に彼女どうまくやる才能があればいい。もうすぐ自分たちで稼いだ
お金で生きていくことができるしいまもバイトで稼いだお金でラージ
ライスを食べている。そうだ料理もしないとな。自炊。好きなだけ炊い
て好きなだけ食べられるし子どもに外食ばかりさせるわけにはいかな
い。まずは転ばない自転車の運転からはじめよう。誰も悲しまない家を
建てよう。たばこはちゃんと分煙しよう。安心して住める家に住もう安
心して帰れる家に帰ろう。子どもを守る使命は両親にあるんだから、と
僕たちは今日それから何年か経ったあと生まれてくる子どもに約束し
て買ったばかりの新しいベッドに二人ならんで眠った。

4/1
観測者 友定洸太

6時に起きて7時15分に家を出る。起床後20分くらいは身支度ができなくて、目覚ましのCDを聞いていた（ラブサイケデリコのアーリーベスト）。4曲目あたりで再生機の電源を切って居間にいく。チョコチップスティックパンをトースターで温めて食べたら思いのほか柔らかくなっておいしかった。もう、温めずには食べられない。

通勤電車は満員だった。前にいる女性がアクオスフォンを持ってなにかを検索している。画面をのぞいてみると「ガンに効く」と検索していることがわかった。効くというのは、鼻風邪とかに使う言葉と思っていた。

通勤中の1時間は、哲学者と音楽家の対談本を読んでいた。冗長だが、ときどき原初的な問いが顔を出してくるのでやめずに読む。

会議室に大人がわらわら集まっているところで紹介され、名乗った。声がうわずった。朝礼はすぐに終わって、それから秋に面接を受けた部屋に入った。面接のときとは違う位置の椅子に座って、一日中、いろいろな人から順番に説明を受ける。入社の一週間前からアルバイトをしていたのでそこに勤める人の名前と顔はわかるが、話を聞くといままで気づかなかったその人独特の身振りや話し方というものが強烈に立ち現れてくる。いままではその人の固有性になんて思いを馳せることはなかったのだが、それは単に自分も働いていたからかもしれない。部屋に自分一人しかいなくなったとき、9脚のOAチェアがてんでばらばらな方を向いていることに気づく。こういう瞬間を、生々しいというのかしら。

昼は白身魚のからあげ定食をおごってもらった。お酒は飲むの？ という問いへの答えは難しい。飲めないわけではないし、かといって、好

きなわけでもない。迷ってから、はいと答えた。ところが(ところが?)、連れていってくれた二人ともお酒は体質的にだめなのだという。食事を終えて10脚のOAチェアが待っている部屋に戻り携帯を開くと、楊くんから今日の記事を書いてくれるという快諾のメールが来ていたので喜ぶ。そういえば、木下くんからは夜中にメールが来ていて、朝に読んで返信した。

17時に会社を出る。この時間に帰るのは社内で僕だけだ(新人だから)。携帯を開くと、ここ数日関係がピリピリしていた人からややほぐれた言葉のメールが来た(長文)。慎重にメールを返してから、同じ携帯の同じ画面(「新規メール作成」)で日記を打ち始める。

まだ17時すぎだから、日記を書くには少し早いだろうか。いつも日記を書く人は、いつ日記を書くのだろうか(今回の企画でわかるかな?)。僕は日記を続けたことがない。だから、「夜に日記を書くつもり」で一日を過ごすのも新鮮だ。そうでなければあの人が持っていたスマートフォンが、アクオスフォンかどうかなんて確認しなかった(でも、それを書いてどうする?)。電車を快速特急から急行に乗り換えて腰かけると、斜向かいの男が同級生に似ていたが、同級生であるわけがなかった。

今夜は早く寝ます。

4/1

観測者 木下侑紀

今日から新卒社会人や新入生たちは新しい一歩を踏み出す。桜は例年よりも早く咲き、新しい門出を祝っているのだろうか。それに合わせてか僕も少しずつ動き始まった。桜の花を見ると、入院していたときのことを思い出す。

僕は高校を一年程病気で休学していたのだが、次の年の四月に何度目かの入院をすることになる。入院する直前までは高校に復帰するつもりでいたので、入院が決まったときには心の中で今年も休学するのだろうな、というぼんやりした気持ちでいた。高校を行かないということは僕の中の世界では前例のないとても恥ずかしことであったので、このまま自分が普通でない奴になっていくという感じがした。入院中はもちろん外に出られずにベッドの上で一日の大半を過ごしていた。そのせいで病室の部屋、特に白い天井が自分の世界の中心になりつつあった。

ある日検査のために移動をしているとき、ふと窓から桜が咲いている様子が見えた。病室からは見えなかったものでそれは僕の暗い心を刺激した。部屋に戻ると真っ白な狭い空間で桃色のまだ咲ききっていない木を想像した。そろそろ見頃だろうか、いつ散るのか、どんな匂いがするのだろうか、病院から離れた自分の街の桜は……、といった具合に。いつの間にか気は紛れていた。

結局このときは近くで桜を見ることは出来なかったが、今思うと次の年に向けての力になった気がする。この年も結局休学することにはなったが、新しい治療法が自分の体に合っていたおかげか、体調は少しずつ回復した。

持病が落ち着いてから何年も経つが、春先の季節の変わり目の時期には、相変わらず調子が下り坂になる。以前は入院を要するほどに悪くなっていたが、ここ数年は自分でも何となく体調の発する黄色信号に気づくので、自分にブレーキを踏みやり過ぎることが出来る。その代わりに一旦ブレーキを踏むと、下宿先の狭い部屋に閉じこもってしまいがちである。他の人が見るとその様子は墮落したようであるだろうし、世を捨てたような生活とも評するのかもしれない。だが僕にとってはないといけな必要悪のような物と思うことにしている。

入院していたときのように、僕にとって桜は今でも僕を外の世界へ連れ出すような存在である。今年咲いた桜は僕にどんな力を与えてくれるだろうか。良いことなのか悪いことなのかは振り返ってみないと正確には分からないだろうが、桜の木が僕に何かを促してくれていると信じている。

4/1

四月一日の観察

発行 ベルフレンドセンター

編集 鈴木貴大

ベルフレンド・センター

平成二十五年

4/2

火曜日